日本プロレタリア文学集・29

ロレタリア文学集・29

口善太郎集

日本プロレタリア文学集・29
谷口善太郎集
定価　二八〇〇円
一九八六年十一月三十日　初版©
発行者　松宮龍起
発行所　株式会社　新日本出版社
〒151 東京都渋谷区本町一の八の七
電話（〇三）三二〇—七一一一
振替　東京　三—一三六八一
印刷所　光陽印刷株式会社
製本所　みさと製本印刷株式会社
第二十一回配本

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害になります．小社あて事前に承諾をお求めください．

ISBN4-406-01464-0 C0393

日本プロレタリア文学集・29

谷口善太郎集

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

三・一五事件挿話……五
綿……一八
踊る……七〇
幼き合唱……八六
樹のない村……一一三
鉄……一四〇
恐慌以後……一四六
行軍……一二三
お千代……一二八
参宮列車で……一二四
帰郷……一二九

土地はだれのものか……二六二
清水焼風景……二八六
解　説……伊豆利彦…四二九
発表年月日と掲載文献……四四七

三・一五事件挿話

一

一九二八年三月十九日の早朝だった。京都市郊外山科町のまだ暗い小停留所から、京津電車の大津行に乗った見すぼらしい洋服男があった。彼は年頃三十歳位だろうか、洋服を着、髭をはやしてはいるが痩せて垢汚みていかにも貧相である。

彼は乗客の疎らな車内の一隅に腰をおろすと、持っていた赤革の小さなトランクと相当嵩張った風呂敷包を大事そうに横に置いた。そして、朝の新聞を広げていかにも落ちつきあるもののごとく構えたが、その実内心は相当に焦燥しているらしく、広げた新聞を決して読んでいるのではなかった。電車が停留所に停まると、彼の痩せた眉宇に鋭い感情が閃めき、動き出すとそれが晴れた。ほとんど一分おき位に銀の腕時計を見つめるところなどを見ると、一刻も早く大津市へ行こうとしている者か、または一刻も早く京都方面を立ち去ろうとしている者なのだろう。

山を越えて電車が大津市へさしかかると、彼はなぜか便利な終点を一つ手前の寂しい停留所であわてて降りた。それはだれの目にも予定以外の行動であるように見えた。

しばらくすると、彼は大津駅の待合室へその姿を現わした。用件を済ませて今度は汽車で山科へ帰るのか？　それにしても不便な、と思っていると、彼の買った切符は山科ではなかった。

「柘植」

「……」

大津から柘植までだから妥当な道順だ。出札係は何の感情も顔に現わさずに手早く切符を売り渡した。と、彼は荷物を待合室の椅子の上に置いたまますぐに構内を出て行った。

時間は丁度、朝の六時二十分上り柘植行と六時三十二分下り下関行急行が大津駅で交行する時だった。柘植行の改札が始まった。待合の人々は――といっても小駅だから僅かの人数だったが――寒さに身を縮めながらぞろぞろと改

札口からガードを経てプラットホームへ上がって行った。しかし、その中には先刻の男が交じっていない。

時間が迫って来た。柘植行は轟然たる響きを立ててはいって来た。間もなく下り列車も来るだろう。改札の駅員は、もう乗客が無いと考えたのだろう。

「上り柘植行ィ！」

を二、三度叫ぶと、そのまま改札口を閉じようとした。とその時始めて彼の姿がそこへ駆けつけた。荷物を抱えると、切符を切って貰う暇もない位だ。

「お早く、お早く！」

かろうじてパンチの音を聞くと彼は切符を引ったくるようにしてガードの中を駆け出した。——汽車は動き出し、そして下りの改札が始まった。

下関行二、三等急行が来た。と、新しい数人の乗客に交じってそれに乗り込む先刻の男の姿があった。どういうわけか彼は上りに乗らなかったのだ。しかしだれもそれに気がつかない。

下りの列車は、大津を離れるとすぐ長いトンネルに差しかかる。それまで両手に荷物を携げて三等車の入口、便所の横に立っていた件の男は、汽車がトンネルにはいり、瞬間全乗客の網膜に室内照明の暗さがきた時、荷物を持ったまま素早く便所の中へはいって行った。

二つの長いトンネルを過ぎると、間もなく京都駅だ。この間二十分、だがまだ例の男は出て来ない。

京都駅の五分間停車を終えて汽車は動き出した。そして京都はずれの鉄橋を過ぎた頃、ようやく件の便所の戸が開いた。だが、出て来たのは髭のある洋服男ではない。長いトンビの和装に白足袋がけという無髭の優男である。しかしよく見ると、それはまぎれもない先刻の男なのだ。彼は便所の中で変装したと見える。

彼は便所を出ると悠々と次の二等室へはいって行った。そして箱の中程に空席を見つけると荷物を棚に、初めて腰を下ろした。窓外には春とはいえまだ冬枯の黒ずんだ近畿平野が、ようやくたけた朝の光に見にくい肌を露出して動いていた。彼はトランクを開けて「苦楽」を取り出すと、パラパラとページを繰った。

二

三・一五事件の勃発はこの日より四日前の暁であった。京都市でも、大学教授の邸宅から労働者街の裏長屋にいたるまで、およそプロレタリア運動に関係あると見られる人

間の住家、事務所は火事場のように荒らしまわされ、百人に近い労働者、農民、学生が検挙せられた。街の要所要所には私服が立ち、オートバイと警察自動車が顎紐かけた警官を乗せて駆けまわった。検挙の手は今なお続き、追及と乱闘が方々で演じられた。街は異常に興奮し、大衆の神経は極度に緊張した。そして、今、大津市からトリックを用いて下関行急行に乗り込んだ変装の男は、この劇しい検挙の毒手を免れて来た京都の共産党員村山秀夫であった。

事件の朝村山は自宅で寝込みを襲われた。だいたい、二月総選挙における党の活動の情勢から見て近く必ず大検挙のあることは想像されたし、又「常に用意せよ！」という党員生活の鉄則に従って村山も絶えず身辺を注意していたのだった。ことに、三月にはいってから、同志細川と共に工場地帯に隠れ家を作り、夜だけ必ずそこに泊まるようにしていたのだった。だのに、肝心要のその日に、昨秋生まれた次女の病気を心配して一晩自宅に寝るという不覚を演ってしまった。が、これは当時の党員として不思議な過失でなかった。当時党はようやく公然の活動を始めたばかりの時で、多くの党員は党の転換の前期に属する合法団体に所属し、その姿を街頭に晒していた。したがってその生活も、党生活の上において極めて不合理である従来の「家庭生活」というものを、清算し切らずにいたのである。

村山は久しぶりに我家に泊まると、赤ん坊の看護よりも疲れが一ぺんに出た。戦線を離れると兵士の心の緊張が緩む。彼は、病妻の心尽しに、馴れた自宅の床の中ですこぶる深い眠りに陥ったのだった。

と、明け方近く――といっても三時頃だったかも知れぬ、物凄い音響を家の前方に聞いて目を覚ました。ハッと思って飛び起きた時はすでにおそかった。数人の刑事隊は、蹴倒した表戸を踏み越えて泥靴のまま彼等の寝室へ躍り込んでいた。有無はなかった。彼は防衛する暇もなく寝巻のままでとり押えられてしまった。

「馬鹿野郎！　何だ、仰々しい。用事があればいつでも行ってやる。馬鹿野郎！」

村山は二人の獰猛な刑事に腕を捩じ上げられたまま、ほんとうに癪に触って怒鳴り出した。

「放せ！　強盗、表へ出ろ！」

が、一隊の頭となってやって来たらしい見覚えのある私服は、村山を捕り押えてしまった強味からだろう、ただちょっと鼻筋に皺を寄せたに過ぎなかった。

「まア、まア、そう怒らずに……イヤ靴のまま上がったのは悪かった。オイ諸君靴をぬぎ給え！　だが、覚悟の前だ

ろうが、一緒に来てくれ給え」
「ああそれから村山さん」
と別の特高が言った。
「——家の中もちょっとさがさして貰います。尤もこれは夜が明けてからでいいんですが」
「事件はいったい何だ」
村山は癪に触ったが訊いて見た。——見当違いなら行ってやってもよい。
「ぼくたちは知らない。——とにかく寝巻を着かえたらどうだ」
「やられません！」
とその時まで泣き叫ぶ二人の子供を庇ってうろうろしていた彼の妻が、泣き声で叫んだ。
「赤ちゃんが死ぬか生きるかと心配してる時、だれが糞、だれが糞……」
そして彼女は子供と一緒に泣き出してしまった。
「赤ちゃんが？」
「そうだ、子供が病気だ。肺炎だ。きょうあすが大事だっちゅんでおれたちがこうして寝ずにいるんだ。それでもつれて行くか？」
「そりゃ気の毒だ。だがぼくたちはいつもの通り上からの命令で仕方がないよ」
——畜生！　こうなりゃア、仕方がない、とにかく外へ出よう。彼はこう決心すると妻に言った。
「何か知らんがちょっと行ってくる。すぐ帰るが赤ん坊を大事にしてくれ。元子、おとなしく留守をしていろよ」
そして落ちついて着かえると、三人の刑事に守られながら外へ出た。
忠実な「女房」である以外何も知らない彼女は、いつもの通りの検束と思ったのだろう、案外落ちついて送って出た。
「大事にしてね」
「ウン、お前も大事にしろ」
村山の家は、京都郊外のプロダクション街にあった。そこから管轄のU警察署までかなり遠かった。彼は三人の刑事に前後を守られながら、まだ夜の明けぬ凍てた新開町の通りを歩いて行った。
彼は家を出る時から逃亡の隙を狙っていた。このまま投げ込まれるのは癪だ。夜は暗く、新開地の道は交錯している。幸いに捕縄はかけられていない。足は——彼は三ヵ月前臓になったS鉄工所内でも有名な足達者だった。逃げるなら、そうだ！　警察へ行くまでの間だ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

K神社お旅所の横手へ来た時、彼はキッと覚悟した。見まわすと、村山のおとなしいのに安心してか、三人のデクの坊たちはかたまって左方にいる。やるなら今だ！——瞬間、村山の精悍な姿はK神社の闇の境内へ脱兎のごとく突っ走っていた。

「畜生ッ！」

三人の刑事はとっさに追いかけた。一人の男は手に持っていたのだろう、得意の投縄を瞬間的に試みたようだった。だが、それは村山まで届かずにかえってその男の行動をおくらした。

村山は、走った！　走った！　闇をついて神社の境内から裏街へ、裏街から路地へ、竹藪の間を、建築中の家の横を。長年住みなれた地帯だ、地理に明るい、身は軽い。彼は後ろには三人の追っかけて来る足音を聞きつつ、曲がりくねった巧妙な行程で突っ走った。

その夜村山は厳戒の中を、彼自身の隠れ家の付近へ行って見た。工場地帯の汚ないうどん屋の二階だった。が近所でそれとなく訊いてみるとそこもすでにバレて用をなさないことが分かった。

それから彼は、十六、十七、十八の三日間運動にはいる前の旧友の家々を転々とした。これらの人々は、今町にどんな事件が起こっているか少しも知らなかった。村山は泊めて貰うばかりでなく、各種の理屈をつけて金も集めた。そして、最後に郊外の山科の知人の家に落ちついた時、すべての事情を打ち開けて亡命の用意をしたのだった。

村山はこの四日間に、つかまった同志の範囲や運動の受けた被害を出来るだけ調べてみた。が、調べれば調べる程、今度の検挙は深刻であり、広範であり、徹底的であることが分かった。彼は未曾有の厳戒に手も足も出ない気がした。とてもこの上、このまま潜行していることの不可能を感じた。海外への亡命計画が考慮に上り、そして準備がととのえられた。

大津駅から柘植行の切符を持って下関行急行に乗った村山は、汽車が京都に停まっている間に、便所の中で下関行の二等切符と急行券を受け取った。準備してくれた人は、その朝彼と打ち合わした山科の知人であった。

三

下関釜山連絡船の桟橋。夜。

大きな連絡船が黒く桟橋に横づけになっている。疎らな街燈が、倉庫や積荷の間々にチカチカと凍り、風が寒かっ

た。暗い海を隔てて対岸の門司の灯がかすかに見える。夜は更けて波の音も寒い。

午後十時三十分の連絡船に乗るべく人々は桟橋に列んで犇めき合っていた。村山も小さな赤革のトランクを一つ携げてその中に交じっていた。

……ハルピンまで行って女郎屋に泊まった。きっと女郎の中にシベリアを放浪した奴がいるにきまってると思ったからだ。いたよ。凄い奴がいたよ。白軍時にゃ絶えず国境へ遠征した奴さ。そいつにおれはきいてすっかり手段を決めてしまった。ナーニ、わけはないことよ、翌朝中国人の馬車を雇うと、金と武器とで威し賺して北へ北へさ。ハハハハハハ、そのうち赤軍の歩哨につかまってチタの監獄へホリ込まれた。監獄へ入れられて助かったと思ったのはあの時ばかりだ。ハハハハハ。……

大正十二年の事件の時、逸速くロシアへ亡命したある同志の経験談が、この場合村山の唯一のパイロットだった。彼は今時こんな原始的な手段が、決して間に合うものでないと考えたが、とっさの場合仕方がなかった。エエ、満州まで行けばどうにかなる。彼は労働者らしい豪胆さでまず奉天までの切符を買ったのだった。

列の中には朝鮮の男女労働者が多かった。外套もネクタイもない扁平な顔の背広、肩掛けだけが借物のようなチョグリの神さんたち、そういう男女が各自両手に荷物を携げて鼻汁を吸い上げていた。

と、そこへどかどかと数人の私服がやって来た。そして列んだ人々に鋭い視線を投げて歩いた。彼等は、先刻停車場と税関にいた奴等だ。

「チェッ」

執念深い奴等だ！　あそこで調べて、ここでまた睨み、そして船の中で徹夜捜査するのだろう。イヤ、待てよ、こりゃひょっとすると何か具体的なホシをさがすのかも知れない。……

村山は思わずドキンとした。――ここまで漕ぎつけてバラされるのは癪だ。

村山は手早く予定の答弁と、言訳を胸の中で繰り返してみた。と、船に近い先頭の方で切迫した会話が始まった。

「用件を言え、用件を」

私服の声だ。

「先刻から言っています。商用です」

「商用は分かっとる。だから何の商用だときいているんだ」

「豆粕の取引です……」

一人の眼鏡をかけた洋服の男が、四人の私服に取り囲まれて押問答している。列は崩れて人々が集まった。村山も行って見た。と、暗い光の中でその男の顔を見て愕然とした。それは見覚えのある神戸の吉田だ！

「ああ、吉田……」

彼は思わず叫ぼうとしてハッとした。落ちつけ、落ちつけ、叫んではならぬ。……

彼はそっと集団を離れて列へ戻った。そしておどる胸をおさえてなりゆきを見守った。

吉田は、わたしは大阪本町二丁目の森田肥料問屋の店員で、毎年三月上旬大連へ取引に行く、ことしは事情あって二週間ほどおくれた。怪しいと思ったらよく調べて下さい。としきりに言訳している。と、今まで問答外にあって吉田の荷物を調べていた一人の私服が、突然立ち上がると静かに言った。

「なるほど、君の言う通り森田商店の名刺も帳簿もある。だが吉田君、君はぼくを知らないかね」

一瞬吉田は愕然としたらしかった。奴等のかまだ！　かかるな吉田、落ちつけ、落ちつけ！……が、駄目だった。明らかに名を呼ばれて彼は極度に狼狽した。

「吉田？　変なこと言いますね。あなたはどなたです？」

「うむ、人違いというかね。それならあとで調べる、おい、こ奴を検束せい」

言いも終わらず、二、三のスパイは吉田に飛びかかった。乱闘が——と言っても擲るのは奴等だけだ——始まった。そして吉田は腕をねじ上げられるとそのまま桟橋を引っ立てられて行った。

村山は血の煮えかえる思いだった。だが、この場合どうすることが出来よう。彼もまた一個のホシとして逃げまわっているのだ。彼は暗然としてこの若い同志の引かれ行く姿を見送らねばならなかった。

乗船が始まった。列は動き出した。朝鮮労働者に交じって甲板へ上がると、そこで税関吏の荷物検査。それが済むと寒い甲板を船底の三等室へ。驚いたことには、甲板にも船室の入口にも一ぱいスパイの目だ。いまいましいが油断はならぬ。

三等船室は倉庫のような個所だった。ボイラー室の隣とみえて暖かい。夏だったら大変だろう。村山は雑然とした室の一隅に、白足袋がけのその特異な姿を落ちつかした。そして、渡された船客名簿用紙に、

神戸市元町三丁目　田川呉服店内

と、手跡を変えて書き入れた。

四

朝鮮にはいるといっそう警戒が厳重だった。村山は、植民地の専制政治を今さらのごとく強く感じた。スパイと憲兵はすべて武装していた。停車場にも、汽車の中にも、奴等はうようよと立ち騒ぎ、怪しいと思う者はたちまち拘引して行った。

この厳戒の中で、さすがに村山もその神経を疲らした。釜山から京城までの十一時間、彼の全神経は緊張し、他のことを考える余地はほとんどなかった。それに彼はきょうまであまり方々を旅行したことがなかった。彼は、東は東京、西は神戸より外を知らなかった。このことは、今の場合便利であると同時に不便であった。顔を知っている範囲が狭い、という点では便利だ。しかし、旅行なれしていないという点で、今の場合一苦労だった。地理も知らない、言葉も分からぬ他国への独り旅。これも確かに彼の神経を不安にした。

彼は次第に焦燥して来た。平常の、精悍で豪胆な気分は彼の顔から消えていった。彼はみずからそれに気がついた。

「これは危険な傾向だ。落ちつかなくてはいかぬ」

彼は勉めて虚心になろうとした。だが、あとからあとからそれが壊れた。

京城で、前の座席へ三十前後の和装の婦人が乗り込んで来た。二言三言話しているうちに、彼はとっさに機知を働かした。そうだ、この女と連れになろう、女連れの旅というものは何かと便利なものだ。

「どちらまで」

「あたし？　奉天までですけど……」

「オヤ、ぼくも奉天までです。独り旅の初旅ですっかりどうも……」

「まアまア、それは……どうぞご一緒に」

女はそう言ってお辞儀をした。

それから二人はひじょうに仲よくなった。女は鮮満に馴れている者で、今内地から奉天へ帰る道ちょっと京城へ立ち寄ったのだと言った。

「お故郷は？」

「長崎ですの、でも船が恐いのでいつもこの道ばかり通っていますわ。あなた連絡船で吐かなかって？」

村山はひどくむかついた船の中の一晩を思い出した。

「ハハハハやりましたよ」
「そうでしょう。あの船は小さくて動揺がひどいんですもの」
「ほんとにねえ。しかしご婦人がよくこの長道を独り旅をやりますね。大丈夫ですか？」
「大丈夫は大丈夫、だけど矢っ張り男の方と一緒だと心強いわね。どうぞご一緒にお願いします」
夜は次第に更ける。間もなく開城へ着くだろう。村山は女と連れになってからしきりに眠くなった。無理もない。大津を出発してからほとんど眠っていないのだ。
村山はいつしかうつらうつらとした。女は立って、親切にも持参の毛布の一方をかけてくれた。夜が明けたら新義州だ。今のうちに一眠りしよう。
幾時間寝たか、ふと村山は揺り動かす肩の手を感じて目を覚ました。
と、ぼんやりした網膜に写ったのは三人の特高の姿である。
「あっ！」
村山は思わず軽い叫びをあげた。
「ちょっと起きてくれ」
スパイは村山と女を起こした。そしてたたみかけた——
「名は？」
「佐藤又次郎と言うものです」
「どこからどこへ行くんだ」
「神戸から奉天までです」
「あなたは？」
女は答える——
「あたしも奉天まで」
「君たちは連れか」
「そうです」
「ハイ」
「君たちは京城で待ち合わしたのだろう」
「……」
「どうだ」
「……」
さア困った。そうですと、言ってよいのか悪いのか？
女は心なしか蒼白な顔をしてしきりに村山の足を毛布の下で踏みつけて来るが、困った、どっちを言えばよいのか分からない。
「うむ、答えられないところを見ると……」
「当人でしょう。……おい、二人ともちょっと車掌室まで来い！」

二人はそのまま引っ立てられた。何ということだ――あれだけ苦心したおれの旅もこれまでか？　村山は、明るくなりかけた窓外を見て観念した。この列車は夜明けに新義州へ着く。そこは国境だ。特高の警戒網の溜りがそこにある。だが、女と一緒に引張るのはどういうわけか？

しかし、車掌室へ行くとその真相はすぐわかった。女は京城のある料亭の酌婦だった。彼女は昨日、情夫である満鮮ゴロと示し合わして前借金を踏み倒しそこを逃げ出したのだ。京城の料亭はそれを知ってすぐ当局へ捜査願を出した。女は注意深く、男と別々に汽車に乗ったが、代わりに村山が連れになった。そして今「帝国の官憲」のために発見されたのである。

村山は込み上げて来る苦笑を禁じ得なかった。とんだ女を利用したものだ。だが、苦笑で済まぬのはこの場の始末だ。

「じゃ君は女の誘拐者でないことが分かったが、何でまた連れのように装ったのだ。え？」

ときた。

村山はぐっと心を落ちつけた。今こそ取って置きの言葉を広げねばならぬ。のるかそるか、とにかくやってみた上だ。

「わたしは……」と村山はひどく哀れに言い出した――「生まれは大津の百人町だンね。そこに老母と弟がいま。姉も一人いるのだすが、十五年も前に家出して今だに消息一つおまへん。ところがこの間正月満州から帰って来はった近所の人がな――これも長い間方々を放浪しやはった人だンが、――わたし共の姉が奉天の淫売屋におったといわはる。又ハルピンへでも行こうかしらんいうてたから、もう奉天に居いへんかも知れんが、とにかく自分は半年ほど前に奉天で逢うた。場所は覚えんが家は欣々亭ちゅうとこやった、と知らしてくれはりました。わたしはこんな親兄弟の面汚しに逢いたいたア思いまへんけど、母はどうしても生きてるうちに一度見たい申しますで、わたしは神戸の主人とも相談して出かけて来ましてん。さがしても分かるやら分からんやら、奉天ですむやらハルピンとか行かんならんやら見当がつきまへんがな。警察の御厄介にでもなればまたひょっと分かるかも知れへん思うてな、出かけて来たようなわけだす。西も東も知りよらへん遠い他国のこと、汽車の中で困っとるうちにあの女と乗り合わして、ちょうど同じ奉天へ行く言わはるんで頼んで親しゅうして貰っていたのだんね」

決してわたしは怪しい者ではおまへんし、と、彼は得意

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com